

満蒙開拓平和祈念館に行ってきました

松本朗

(1) 長野県の阿智村にある満蒙開拓平和祈念館に行ってきました。この会館は、旧満州に入植した満蒙開拓団の苦難の歴史と平和の大切さを次世代に伝えることを目的に、2013年4月24日に開館しました。

この会館の運営は、行政や国の補助金はいっさいもらわず、純粋に市民のカンパや基金、入館料によって行われています。

(2) 会館内には、1930年代の「満州へ行こう」と呼びかける政府のポスター、入植した人々の生活した家、当時の服装そして少年義勇軍の写真、体験証言を綴った文書のコーナーなどがありました。また、中国残留孤児の帰国に尽力した阿智村の僧侶である山本磁昭の資料も展示してありました。

(3) かつての大日本帝国が中国の東北部を植民地にし、そこを満州国と名付けて、多くの日本人農民を入植させました。その数は27万人におよび、そのうち長野県からの入植者が一番多く37859人でした。政府は「満州に行けば20町歩の地主になれる」と甘言を弄して入植を進めたのでした。

(4) しかし、敗戦間近の1945年8月9日、ソ連軍の満州侵攻により入植者の人々は逃げる途中で多くの犠牲者を出しました。満州に居たとされる関東軍は入植者を守るどころかソ連が侵攻してくることを事前にわかった時点で、住民に何も知らせず、自分たちだけでこっそりと撤退したのでした。しかもソ連軍が追いかけるられないように川をつなぐ橋を爆破までしたということです。そのため多くの入植者が殺され、難民収容所に入れられてしまいました。

(5) 満州の夜は非常に寒く、多くの人が凍死したり、病気で死んだりしました。ソ連軍につかまるくらいなら、と自殺する人も多くいました。逃げる途中、体力のない子どもを生かすために、多くの子どもたちが現地の中国人に預けられました。若い女性たちは中国人に嫁ぐことで生き延びました。



こうして家族がバラバラになるという悲劇が生まれ、後に「残留孤児」と呼ばれる人々が多く生まれました。

(6) 逆に命からがら逃げ帰っても途中で両親や兄弟が死んでしまい、日本に帰ってきたときは1人ぼっちになってしまった10歳の少年もいました。その人は名古屋在住の方で、今はピース愛知平和資料館の「語り手の会」の一員として子どもたちや若者に自身の体験を語る活動を続けています。

(7) 地元の人々による村民劇団が活動を続けています。劇団員には小学生も参加しており、満蒙開拓団の悲劇を演劇を通じて過去の歴史体験を継承し平和の尊さを共有しようという試みです。劇は三部作で1部は小学生による演劇です。親と離れ、中国人に預けられる子ども、日本に帰ってきたものの家族は死んでしまい、ひとりぼっちで生きる子どもを演じています。2部では娘を生かすために中国人の男性に嫁がせる父の苦悩を描いた演劇が行われました。3部では未来の世界に移ります。そこでは満州移民と同じことが繰り返されようとしている内容です。舞台は未来の阿智村で、村役場での出来事です。地球とは別の星「エダマメ星」に移住しよう。そこでは黄金のエダマメがたくさん作れる・・・村長は移住する人を村民から集めようと必死になります。なぜなら移民する人が多い村には国から補助金がたくさんもらえるからです。しかしエダマメ星の詳しい情報は村民に明らかにされず役場で働く人々は満州移民と同じことを繰り返すのではないかと不安を募らせ、反対運動を村民とともに行う、という物語です。

たしかに、こういう形でいつ同じことがくりかえされるかわからないのが今の現実でもあるし、

だからこそ歴史の事実を正しく継承し知っておくことが大事なのだと思います。

(8)ところで、「満州開拓団」の悲劇、悲惨な体験、証言は多くあるのですが、地元の「満州」と名付けられた地に住んでいた中国人はどのような状況だったのでしょうか。証言の中には「ただ同然で土地を奪っただけではないのか」という疑問を述べる人もいました。また、ソ連軍が侵攻した時、多くの子どもたちや娘たちは、預けられた中国人にとっても親切で優しくしてくれた証言もあります。展示では中国人はどんな暮らしをしていたのかという記録があまりありませんでした。

しかし満蒙記念開拓団のホームページに、満州移民に反対した元大下條村長の佐々木忠綱さんへのインタビューをしたときの書きおこしの文書が掲載されていました。

佐々木さんは満州移民に反対した理由として、「私は昭和13年に、下伊那が、これからは満洲開拓の時代になったで、村長で組織して、満州、開拓地を視察するということになりまして、それで私もそれに参加して、昭和13年のたしか5月頃、一か月くらいかかって満州の開拓地を全部視察しました。

その時に第一次弥栄というところを見、それから第二次千振郷という、これはまた非常に進歩的な資本主義的な経営をしておる、当時から見ればとても進歩的ということでありまして。それから第五次だとかいろいろな開拓地をずうっと見て、満州をずうっと一巡して、そして帰ったのでありますが、私が行ってみてちょっと疑問を感じたのが、第二次千振郷なんちゅうのはもう経営がほとんど資本主義的な営利主義な経営でありまして、それから耕地はもう全部立派な既墾地、これどうしても強制収用した土地だと思いました。それで第一次の弥栄というところはやや開墾した痕跡もありました。それからもう一つ、松島自由移民団というのはこの下伊那から松島という人が中心になって自由移民団というのがありましたが、そこへ行ってみましてところ水田は全部朝鮮人が作って、広い水田地帯だったのですが、これも結局買収という形は形だったんでしょうが強制収用でしたなあ、もう見渡す限り。そして、これはど

うも開拓ではなくて強制収用ということは、これはちょっと疑問点があるという、疑問を私は持って帰りました。

それから、ハルピンの市街でありましたが車に乗って、我々がいくつにも分かれて車に乗って行きましたところ、幾人ばか乗とったか、10人か15人ばか乗とる車で行きまして、運転手は日本人でした。そうしたら、向こうから車がきて「止まれ」の号令をかけて止めまして、それで降りてって運転手呼び出して殴って、・・・さかんに怒って、あれ朝鮮人だか満人の運転手だったか、そのこっちに対して態度が悪いちゆうて。まず、日本人はおそろしく横暴だということにも疑問を持って帰ってきた。」

と述べています。私たち日本人が陥りやすいのは戦争の話になると被害の体験だけになりやすい傾向があるのですが、私も満州の出来事を考えるとそうなるころでした。満州はまちがいなく植民地であり、植民した日本は加害国なのだということを何よりも第1に考えなければなりません。植民地としての満州はどのようなものだったかを研究する本、中国人の証言を集めた本も多くあります。また満州での事実を歪曲しようとする歴史修正主義の本も多くあります。これらの本をよく読んで、改めて侵略の事実を学び、多くの人々に、そして後世に伝えていかななくてはならないと強く思いました。

頑張りましょう！ (2017-11-10)

満蒙開拓平和祈念館

所在地 長野県下伊那郡阿智村駒場 711-10

電話 0265(43)5580

休館日 火曜日

<https://www.manmoukinenkan.com/>